

はじめに

今や生物学と言えば、基本は分子生物学と言ってよいでしょう。この学問の歴史はほぼ100年（正確には90年）。学問の歴史としてはそれほど長いとは言えない時間に急速な展開をしました。その中で生れた『細胞の分子生物学』¹という、みごとに教科書を通して考えた21世紀の生命研究の歴史とこれからが本稿のテーマです。

「教科書」という言葉で、まず思い出すのが小学校4年生の時の体験です。1945年8月15日に太平洋戦争が敗戦という形で終わりました。2学期になって学校へ行ったら、最初に指示されたのが、「教科書の墨塗り」でした。それまで、先生から「教科書は日本人として学ぶべきことが書いてあり、あなたにとって一番大切なもの」と教えられてきました。その同じ先生が、「教科書にあるこの部分

は間違いなので墨で消しなさい」と指示されるのですから、「これって一体何？」です。全部を黒くするページも少なくありませんでした。ふしぎな気持ちになって当然です。私が大人になってから権力や権威には意味を持たせないという生き方をしてきた原因は、多分この体験にあるのでしょう。

以来、教科書は便利な道具以上のものではないと思って過ごす中で『細胞の分子生物学』と出会い、教科書観をひっくり返されました。そこには、「考えること」を支えてくれる楽しさが充ちており、大切なものと感じられたのです。日本でも教科書にしたいとの思いで翻訳しました。今、この教科書を使っている方にそれがどう受け止められているか気になり、私の中で教科書『細胞の分子生物学』から広がった、生きものを巡る知の旅へお誘いし、一緒に、生命科学のあり方を考えたいと思いました。

まず、この分野の鍵となる考え方を追うところから始めます。